

# パワフルな街ニューヨークでの 研究生生活を終えて

埼玉大学教育学部 准教授

**清水由紀** (しみず ゆき)

2011年度の1年間、ニューヨーク大学心理学部のユルマン教授のもとで研究生生活を送ってまいりました。ユルマン先生は社会心理学者で、自発的特性推論(他者の行動を見たり読んだりしただけで教示や意図がなくても瞬時に特性を推論すること)を初めて報告した研究者です。私の専門は対人認知の発達ですが、近年、自発的特性推論の発達過程を検討しており、かつ比較文化的検討を行いたいと考えていたため、思い切ってユルマン先生にアタックしてみました。すると、発達心理学者とのコラボレーションに興味を持ってくださり、ユルマン先生に受け入れていただけることになりました。こうして、無事ニューヨーク大学での共同研究を開始したのでした。

まず印象的だったのは、ニューヨーク大学が、学外の研究者との交流をととても大切にしているということです。心理学部だけでも、アメリカ国内外から多くの研究者がサバティカルで、入れ替わり立ち替わり来ていました。そしてそれらの人々には客員研究員として、様々な資源が惜しみなく与えられました。研究室は二人部屋でしたので、同室の研究者と日米の大学のシステムの違いを語り合うなどの交流ができたのは、貴重な経験でした。

また、実にうまい仕組みだなあ!と感嘆したのは、リサーチアシスタント(RA)の制度です。特に意欲のある学生は、セメスターの終わり頃に、狙いを定めた先生

のところへ直接メールでCVを送り、「あなたの研究室でresearch experienceを積ませてください!」と嘆願します。週に最低10時間、数カ月の単位でプロジェクトにRAとして参加するのです。全て無償労働!ただし学生にとっても、その経験を履歴書に書くことができ、進学や就職に有利になるというメリットがあるというわけです。

ユルマン先生のところにも、多くの学生からこのようなリクエストがどしどし届き、またどこで聞きつけてきたのか?私のところにもぼつぼつ届きました。そのメールの文面の熱心さと自己アピール力に、とても感心したのを覚えています。それらの学生を一人ひとり面接し、最終的に優秀な3名のRAを得ることができました。こうして、英語による刺激作成、アメリカ人データの収集など、RA達の協力なしでは到底実現できなかったことを、何とか終えることができました。

授業も聴講しましたが、驚いたのは毎回膨大な課題が出されることです。次回までに分厚い専門書1冊を読んでくる、ということもありました。term paperと呼ばれる最終レポートもかなり要求が高く、とにかくどんどん学生に勉強させるのが当たり前でした。うーん、日本の大学生が勉強しないと言われているのは、やはり否定できないかもしれません……(自らの教育への反省も込めて!)

ニューヨークという街は、歩くのも話すのも仕事の仕方も、全てが極めてスピーディで、皆せかせ



## Profile — 清水由紀

2003年、お茶の水女子大学博士後期課程人間文化研究科修了。博士(人文科学)。専門は発達心理学、社会心理学。著書は『他者とかかわる心の発達心理学』(共編著、金子書房)、『学校と子ども理解の心理学』(編著、金子書房)、『パーソナリティ特性推論の発達過程』(単著、風間書房)など。

かしています。そして、世界から何かを求めて人々が集まってくるので、街にうごめくパワーは物凄いです。私は初めての海外長期滞在ということもあり、そのパワーにやられそうになることもしばしばでした。なので、学会参加のためサンディエゴに行った時には、人々や街のゆるやかな様子に、心底癒されたものでした。しかし、少し離れるとまた帰りたい!と思わせる吸引力があるのがニューヨークです。私もそろそろあの街が恋しくなっています(笑)。うまくいかないことや苦労も本当にたくさんありましたが、あのパワフルで刺激的な街で、多様な分野・人種の人々と知り合い、深〜く濃〜い研究生生活を送った経験は、一生の宝です。



ユルマン先生との打ち合わせ